

## 藤井厚二「聴竹居」の保存と活用

—建築の価値を社会的に共有していくプロセス—

### 大山崎町と「聴竹居」

京都府乙訓郡大山崎町は、大阪府との県境にある人口1万5千人ほどの町である。この京都府下で一番小さな面積の町（約6平方キロ）には、北に天下分け目の合戦で有名な天王山、南には桂川・宇治川・木津川の三川が合流し淀川になる雄大な景観があり、名神高速道路、東海道本線、新幹線、阪急電車などの国土幹線が縦横に走っていて、治水上、交通上の要衝でもある。さらに、千利休の唯一現存する茶室である国宝「待庵」、本館が登録有形文化財に指定され、増築の設計を建築家・安藤忠雄が手がけたアサヒビル大山崎山荘美術館、重要文化財の宝積寺などの近世・近現代建築の宝庫でもある。

そのちいさな町・大山崎に京都帝国大学教授、建築家の藤井厚二（1888年-1938年）（写真1）の自邸「聴竹居」（写真2）が竣工88年を経た現在もそのままの姿でひっそりと建っている。

生まれ）と同時代に世界に提示した日本発の木造モダニズム建築としても、今後、世界的に評価されるに足る日本を代表する「住宅」のひとつと言える。

1996年三重県立美術館で開催された展覧会に「聴竹居」を展示することに協力してから私と「聴竹居」との繋がりは始まり、今年で足かけ21年になる。1999年に長い間住まれて居られた方が亡くなり空き家となつた。2000年には竹中工務店大阪本店設計部の有志で実測調査を行つた（2001年彰国社から「聴竹居実測図集」として出版）。同年、日本のモダニズム建築を代表するとして「聴竹居」がdocomomo20選（写真3）に選定された。2000年にはdocomomo 20選の、2005年にはdocomomo100選の展覧会で、さらにテレビや雑誌でも取り上げられるようになり、徐々に町の外側からの注目により社会的認知度を高めていく。

松隈 章

株式会社 竹中工務店 設計本部設計企画部



写真1 藤井厚二 肖像写真



写真2 新緑に包まれた「聴竹居」全景

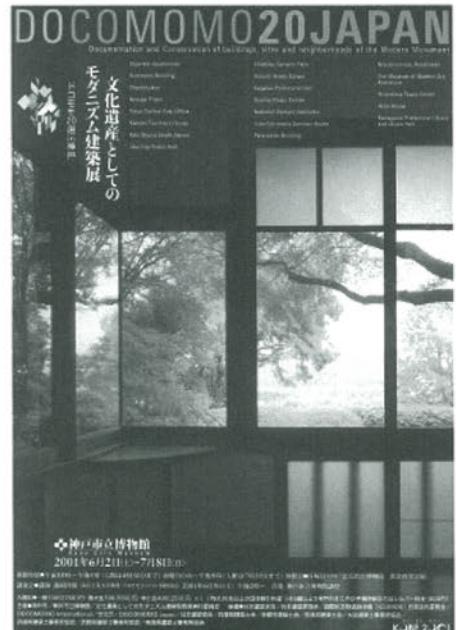


写真3 「聴竹居」の縁側  
docomomo 20選関西巡回展の案内チラシ

松隈 章

1957年兵庫県生まれ。1980年北海道大学建築工学科卒業後㈱竹中工務店入社。大阪本店設計部、本社・企画室、本社・地球環境室などを経て2010年より本社・設計本部設計企画部副部長。設計業務の傍ら近代建築の保存活用や公益財団法人ギャラリーA4（エーカーワッド）での企画展をはじめとする数多くの建築展に参画。

主な著書『聴竹居 藤井厚二の木造モダニズム建築』平凡社コロナブックス、『環境と共に生する住宅 聽竹居実測図集』彰国社（共著）、『16人の建築家・竹中工務店設計部の源流』井上書院（共著）。

保存・修復・再生に関わった「旧ジェームス邸」が建築学会作品選集とBELCA賞受賞。

「聴竹居」は、藤井厚二が自ら興した環境工学の理論を生かした実験住宅で、その完成形とした第5回目の自邸である。そこには日本の気候風土にあった真に日本人の心と体に適した「日本の住宅」が実現されている。20世紀を代表する建築家ル・コルビジエ（1887

### 保存と活用は地元第一主義の思想から

2000年春から8年間は、空き家となつた「聴竹居」をある方がオフィスとして借用していた。2008年春からは、私が借家人（持主は藤井厚二の次女・東京在住）となり、地元・大山崎町の皆さんと任意団体・聴竹居倶楽部を結成し代表に就任、より積極的に公開活用すべく活動を始めた。当時は建築専門家の中でもそう多くの方がその存在を知らない「聴

竹居」。個人邸であるがゆえにましてや、一般の方々には全く知られていなかった。2008年の春に「聴竹居」の徒歩圏に住む地元の有志数人に集まって頂いた時には、「どこが良いのか」「どこが悪いのか」理解できず皆さん一様に、その価値がわからずにきょとんしていた。公開のしくみや管理体制を整えたうえで、多くの方々への情報発信手段としてまずホームページをつくり、予約制での一般公開をおそるおそる始めた。その後、少しずつ全国各地から見学者が来場されるようになり、現在では、その数は年間約3000人～4000人にも達する。

こうした保存と活用をボランタリーで手掛けている聴竹居俱楽部は、私を除いて全て地元のそれも徒歩圏に住む方々だけで構成している。このことが一番重要で、いくら著名な有識者が評価しようが、外部の専門家が讀えようが、地元の方々が心の底から愛着を持ち続けない限り、地域に根差した建物は絶対に次世代に遺すことは出来ない。

実は、この「地元第一主義」の考えに至ったのには、私自身の苦い経験があるからである。2000年代の半ばごろ、ある木造の小学校の建物が保存か解体かで揺れ動いていた。地元に駆けつけた有識者メンバーの一人から聴いていた活動はすこぶる順調で保存に向けて動いているとの印象を持っていました。ある年の夏休みの家族旅行の途中で立ち寄った。突然ではあったものの好意的に受け止めてくれるだろうと見学を申し出たところ、当直していた教職員と校庭で児童を遊ばせているPTA会長それぞれから信じられない言葉を聞くことになった。ちょうど池田小学校事件があった後だったことも影響しているが、それは、「台風で屋根が飛ぶくらい脆弱でこんな死角の多い校舎は、早く新しい建物に建替えて欲しい、よそから来た人が遺せと騒いでいるが迷惑だ」と言ったニュアンスの言葉だった。はるばる家族で訪れた建物で、当時小学生だった我が二人の娘たちだけでも、木造の校舎を見学させてほしいと言う言葉も全く通じず、門前払い。本当に苦い想い出となった。この私的な経験から、地域に根ざしている建物の保存と活用は地元の方々の想いに寄り添うかたちでよそ者が参加し協力していくやり方ではない限り頓挫すると言うことを教えられた。以降、

建物の保存と活用に取り組む場合には常に「地元第一主義」を念頭に置くようになった。

存続が危うかった我が町神戸市垂水区塩屋町の「旧グッゲンハイム邸」(写真4)が2007年に地元の一家によって救われた時も、ちょうど組織化された地元の塩屋まちづくり推進会の活動の場としての活用を勧めた。今では地元のまちづくり活動には欠かせない建物として活用が定着している。



写真4 旧グッゲンハイム邸 (神戸市垂水区塩屋)

大山崎の地においても「地元第一主義」は功を奏し、今では町のガイドマップに「聴竹居」の写真が載り、まさに町の文化資源としての地位を獲得することが出来た。さらに近年は新聞、雑誌、テレビでも多く取り上げられるようになり、2013年のお正月のNHKのテレビ番組「美の壺・邸宅スペシャル」の中で「聴竹居」が紹介され天皇皇后両陛下のお目にとまったことで、同年6月24日に行幸啓(写真5)が行われた。



写真5 天皇皇后行幸啓。左から2番目が筆者  
2013年6月24日  
(写真提供: 小西家)

## 生きた活用を継続し続ける

建物の保存と活用は建物を生きた形で使うことが大切だ。「聴竹居」は住宅として建てられた建物である。「其の国を代表するものは住宅建築」として生涯日本の気候風土に適合し日本人の理想となる住まいを追求した藤井厚二の思想と空間をより多くの方々に体感して

もらうために、敢えてある個人や企業が専有する住まいとして独占するのではなく、水・金・日の週3日の予約制の見学や各種イベントを通じて時空間を体感できる拓かれた「住まい」としている。

2008年春の公開開始当初は口コミで情報を得た建築関係者の見学会が続いたが、2009年春には庭での新緑コンサート(写真6)、同年秋には室内での紅葉コンサートも開催することが出来た。2009年晚秋には、今や恒例となったイベント「紅葉をめでる会」(写真7)の第一回目を開催している。春の「新緑をめでる会」と秋の「紅葉をめでる会」は、「新緑」や「紅葉」に包まれた「聴竹居」を気軽に見て頂こうとの主旨から始めたイベントで、事前予約なしで庭を開放、希望者は室内の見学も順次可能として、初めての方やリピーターの方々など多くの方々が訪れる恒例行事として定着している。



写真6 新緑コンサート 2009



写真7 紅葉をめでる会 2013

2009年春には聴竹居の空間を展覧会の場にした漆作家の展覧会「聴竹居との出会い栗本夏樹展」(写真8、9)を、2013年春には現代アーチストの河口龍夫展(写真10)も開催し、聴竹居の空間と現代アートとの対話を愉しむイベントになった。



写真8 栗本夏樹展 案内チラシ 2009年



写真9 栗本夏樹展（撮影：清水 裏）

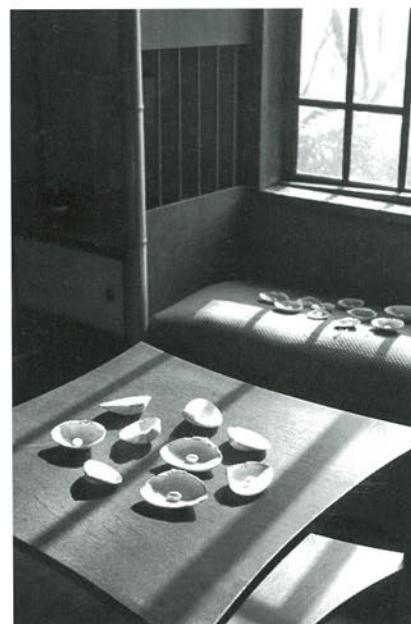


写真10 河口龍夫展 2013年

## 地元・大山崎を見つめなおす活動

2011年と2012年に聴竹居倶楽部が主催して大山崎町の魅力を発見するイベント「大山崎百人百景」撮影会（写真11）と展覧会（写真12）を開催した。この催しは、一般公募した町内外の一般の方々100名に富士フィルムのレンズ付フィルム「写ルンです」を渡して、半日、大山崎の魅力あるシーンを27コマに捉えてもらおうと言う企画。

## 大山崎百人百景 2012



**大山崎の魅力を撮りつくそう！**  
フィルム付カメラ「写ルンです」で斬り撮るまち歩き撮影会  
**参加者100人募集！**

主催：聴竹居倶楽部 協賛：富士フィルム株式会社・アサヒビール大山崎山荘美術館  
後援：大山崎町・大山崎商工会 協力GalleriaN・大山崎ふるさとガイドの会

\*この催しは、平成24年度京都府地域再生プロジェクト支援事業、（公財）京都府町村振興協会支援事業、大山崎町地域力再生事業補助金制度の支援を受けています。

写真11 大山崎百人百景撮影会案内チラシ

その成果の発表の場として大山崎ふるさとセンターのロビーに参加者100人×27コマ＝約2700枚もの写真を一堂に展示すると同時に全ての写真を収録した冊子も作成した。「大山崎の素敵なところをたくさん見つけられ、ますます好きになりました」「参加者全員が同じカメラを使うので、それぞれの視点がわかつて面白い」「27枚しか撮れないのが面白い」などの感想が寄せられ、大山崎町民も普段はほとんど気が付いていない大山崎の魅力を再発見するイベントとなった。



写真12 大山崎百人百景展覧会の風景

こうした地域をあらためて見つめなおす活動も聴竹居倶楽部はその中心になって推し進めてきた。

## 藤井厚二の他の建物の保存と活用へ

聴竹居倶楽部の活動は大山崎だけに留まらない。藤井厚二が設計した他の建物の保存と活用にもそのノウハウを生かしている。広島県福山市鞆の浦の藤井家の別荘だった建物を復元再生した「後山山荘」（写真13）に2013年末に聴竹居倶楽部のメンバーが訪れ、所有者、地元福山の方々と公開活用についての意見交換を行った。そして、2014年春から月一回の公開が地元のボランティア組織・後山山荘倶楽部により始まっている。



写真13 「後山山荘」（広島県福山市鞆の浦）

さらに、2015年からは、藤井厚二が「聴竹居」を建てたあとすぐに実現した注文住宅「八木市造邸」（大阪府寝屋川市）（写真14）も聴竹居倶楽部メンバーによるアドバイスを受け、地元中心のボランティア組織の八木邸倶楽部により月一回の公開を始めている。



写真14 「八木市造邸」（大阪府寝屋川市香里園）

大山崎「聴竹居」に始まった地元中心の活動を、鞆の浦「後山山荘」、寝屋川市「八木市造邸」へと拡げ、ホームページのリンクをはじめ人的交流や情報交換を続けている。地元に遺る藤井厚二の建物を愛するメンバーが、それぞれの土地柄に併せて公開するとともに協調・連携していくことで、保存と活用をより良いものにしていくこうと言う機運が生まれてきている。

## 繋がりー建物が教えてくれること

偶然にも出会った「聴竹居」に1996年以来関わってきて今想うことは、ひとつの建物の持つ可能性の大きさだ。ひとつの建物が、人と人、人と自然、さらに人と地域、そして過去・現在・未来を「繋ぐ」大事な存在だということである。グローバル社会、経済至上主義など、全てがフラットに効率やお金を優先した現代では見えにくくなってしまったものをふと気が付かせてくれる。

私自身も経験したことだが、1995年阪神淡路大震災や2011年東日本大震災など一瞬にして日常性が不可逆なものだと気が付かされる災害に見舞われた時、建物や地域の風景の大切さや愛おしさを自覚することになる。ふだん何気なく暮らし、見ている建物や地域の風景の環境から実は大きな影響を受けているし、それらは人生にとって大切な記憶装置になっている。明治の終わりから西宮の風景に



写真15 1995年 阪神淡路震災直後の  
武田五一設計「芝川邸」  
(撮影:大西写真事務所)



写真16 2007年 博物館明治村に移築復元された  
武田五一設計「芝川邸」

なってきた芝川邸が同じ場所には遺せなかつた。明治村に移築復元されたが地域の記憶からは失われた(写真15、16)。

私も「聴竹居」に出会わなければ、大山崎町を訪れるとも無かつただろうし、地域の方々との交流も生まれえなかつただろう。さらに「聴竹居」を通じて藤井厚二の「日本の住宅」と言う思想に触れることも出来たし、日本の住まいの歴史、日本における建築の在り方、日本人の自然との付き合い方などにも想いを馳せることにも繋がつた。大山崎町の方々にとっても、同じようなこと感じただろうし、何よりも「聴竹居」の存在によって大山崎を誇らしく思う地域愛(シビックプライド)醸成の一助になったと思う。

地域と共に存在し続ける生きた建物には、「愛着の連鎖、継承」を支える「たてものがかり」の存在が不可欠だ。聴竹居俱楽部はまさに「聴竹居」の「たてものがかり」なのである。

## 5つのステークホルダーの共創

阪神淡路大震災以来様々な歴史的な建物の保存と活用に関わってきた経験から、それらを持続していくためには、5つのステークホルダー(図1)が同じ方向性をもつことが何よりも大切なことが分かってきた。その5つとは、①歴史的な建物を有効活用したい所有者②歴史的な建物を活かして付加価値を創造しようとする事業者・使用者(①と同じ場合もある)③歴史的な建物を地域の大切な文化遺産として遺したいと思う地域の住民④歴史的な建物を地域のアイデンティティやシンボルとして遺し生かしたいと考えている地元行政⑤歴史的な建物を長期にわたり維持管理してきた設計者、施工者である。つまりは、歴史的な建物は地域そして社会システム全体で支えていくものだと言える。



図1 5つのステークホルダー

「聴竹居」についても同様だ。今のところ、5つのステークホルダーは保存活用と言う同じ方向性にある。しかし、個人所有の財産であるがゆえに、固定資産税さらに相続税負担の問題は避けることは出来ない。今後は、聴竹居俱楽部を中心にした地域住民の協力のもと、地元行政と連携しながら、昭和初期の日本の(木造)モダニズム建築を代表する建物として国の「重要文化財」に指定する動きを加速させるとともに、持続可能な所有形態や保存活用体制を整備していくことが求められている。

## 「聴竹居」のこれから

「聴竹居」と出会ってから20年、ようやく「聴竹居」などの歴史的な建物をきちんと次代に残していく社会的な機運が生まれてきている。藤井厚二是、自ら確立した環境工学の視点から日本の気候風土の特長を概説した上で、図面と絵や写真で完成形としての「聴竹居」を実例として掲載しながら、志向した日本の気候風土と日本人のライフスタイルや趣味に適合した「日本の住宅」の思想を紹介する英文の著書『THE JAPANESE DWELLING-HOUSE』(写真17)を1930(昭和5)年に発行、「日本の住宅」の素晴らしさを世界に向けて発信している。



写真17 藤井厚二著  
『THE JAPANESE DWELLING-HOUSE』1930年

それから86年、昭和の時代を越え平成を迎えて四半世紀になる今、「聴竹居」は藤井厚二の想いをのせて20世紀の日本を代表する世界的な住宅遺産として再び世界発信する時を迎えていている。(敬称略)

(まづくま あきら)